# 夜の妖精の小さな旅

水沢　流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜の妖精の小さな旅

【Ｎコード】
Ｎ１４３９Ｙ

【作者名】
水沢　流

【あらすじ】
「大きくない、力だってない。でも大丈夫、私には……」

## 登場人物＆内容紹介

［作者より］

子供への読み聞かせ（寝物語）として、朗読用に書き始めたもの。
剣も魔法も使えない妖精が、ちょっとの勇気と、知恵で困難を切り抜けて行く冒険ファンタジーです。
ひらがな多めの構成で、文体は語り口調。
小学校ぐらいからを対象に、親子で読める物語であればと願っております。

ーーーーーーーーーーーーー

・登場人物紹介

［ニッケ］
夜の妖精の子。
銀月色の髪と、アメジスト（紫水晶）色の目を持つ。

［ジオ］
夜の国にいる「小さいもの」。
ペリドット（緑）色のひとみに黒い体。
鳥になったり猫になったり魚になったりできる。
ほんのり光るしっぽの先は、気分によって色が変わる。

## 旅立ち

そこは、まっくらな国でした。

やさしいやみに包まれた、しずかなしずかな夜の国。

夜の妖精ニッケの物語は、この、夜の国から始まります……。

ニッケの髪は、銀月色をしています。
目は、すきとおるようなムラサキ色。

でも、ニッケはものを見たことがありません。
もちろん、ニッケだけではありません。
夜の妖精たちはみいんな、世界が見えていないのです。

パパもママも、王さまも女王さまも。

でも大丈夫。

夜の妖精は耳がとっても良いですし、お守りのおかげで危険を知る事ができるのですから。

「ニッケ、いる？」

「いるわ、ママ」

「ちょっと来て。ジウムおじさんに届けてほしいものがあるの」

「はあい」

ニッケは立ち上がって、ママの声のする方に向かいました。

家のカベにはたくさんの文字が彫られていて、それにさわりながら行けば台所につきます。

夜の妖精の国の壁は、どこもかしこも文字だらけ。

みんなが、それを目印にして移動するためです。

「来たわ、ママ」

「はい、これ」

甘いにおいがするバスケットを、ママがニッケに手わたしました。

「なあに、これ？」

「あら、わかっているんでしょう？」

「ふふ、根っ子の実のジャムね。そうでしょう？」

「そうよ、おじさんに届けてちょうだい。いっしょに入れたアメは食べていいから」

「やった！」

ニッケはよろこびました。

なにしろ、根っ子の実のアメはうっとりするほど甘い、とてもおいしいアメなのですから。

とろんと舌の上で溶けて、すうっと水のような後味を残す。夜の妖精の子どもならば、誰もが大好きなアメなのです。

「ジウムおじさん、よろこびそう」

「もちろんよ、ママが作ったんだから。おねがいね、ニッケ」

「はあい」

ニッケがそう言うと、ピョコンと棚からジオが顔を出しました。

ジオは、夜の国にいる「小さいもの」。

まっくろな体と緑のカンラン石色の目をもっていて、しっぽの先にともる白い光の色を、気分によってくるくる変えるのです。

猫や鳥、魚などいろんな姿になれるジオですが、今日は猫の姿になっているようでした。

「みゃっ」

「ジオも行きたいの？」

「みっ」

「いいわ。いっしょに行きましょ？」

そう言ってニッケがうでをのばすと、ピョンとジオがとびのってきました。

その頭をちょっとだけなでて、門の方へと歩いて行きます。

そして家から出る扉を開けて、ニッケは後ろをふり返りました。

「行ってきます、ママ」

ニッケが手をふります。

「みゃーお」

ジオも光るしっぽをふります。

ママはその空気のゆれを感じて、「行ってらっしゃい」と明るい声で送り出してくれました。

## 旅立ち（後書き）

まだ機能に慣れずに戸惑っております。
アドバイスなど御座いましたら、よろしくお願いいたします。

## 根っこの畑

家を出て少し歩くと、ふんわり、甘い風が流れてきました。

「みゃんっ」

ジオが、ぴんと耳を立てます。
それまでカベに手をつきながら歩いていたニッケは、立ち止まってバスケットに手を入れました。

ママからもらったアメを出して、ぱくりと一つ口に入れます。
それから、もう一つアメを取り出しました。

「はい、これジオの分ね」

「みゃうっ」

ニッケにさし出されたアメに、ジオが元気よくこたえます。
そして、もそもそと黒いからだを動かして、小さなリスの姿になりました。

もらったアメを、カリカリとかじるジオ。
その音を聞きながら歩いて行くと、やがて、甘い風のもとにたどり着きました。

……根っ子の実の畑です。

地面の下にある夜の国では、どこも岩の天井から根っ子が下がっていて、そこに時々、ぷっくりと金色のみつが入った実ができるので

す。

これをにつめてジャムやアメにしたり、じっくりと寝かせてお酒にするのですが、良く実が取れるここは、畑として大事にされていました。

「ジオ、落ちないでね」

肩に乗ったジオに声をかけて、いつもどおりの道を歩いて行きます。そのまわりではビーズのような実に光が当たって、キラキラ、宝石のレースのようにかがやいていました。

そこを、数分歩いたころでしょうか。

「やだ、道が変わっているわ！」

ニッケは叫びました。

「アブナ石が鳴いているもの。前はまっすぐ行けたのに」

胸に下げた白い石がリンリンと鳴っています。

アブナ石。

夜の妖精達にだけ、危険を教えてくれるふしぎな石です。夜の妖精がうまれると、必ずこれをわたすのが夜の国の決まりなのです。

「ねえ、ジオ」

「みゃっ？」

いつの間にか猫の姿に戻っていたジオが、ぴこんと耳を立てました。

「ジオ、あのね。とっても遠回りになってしまいそうなの」

「みゃ……」

畑を抜けてまっすぐ行けば、おじさんの家はもうすぐそこなのに。
それに、ニッケはここ以外の道を知りません。

他の道に行ったら、どんな遠回りになることか！

でも、石が危険を教えてくれているのを無視するわけにはいきません。
ニッケはなやんでなやんで、けっきょく、根っ子の畑から横道に出ました。

リンリンと言う音が止まります。

「やっぱり、こっちでいいみたい。行きましょう、ジオ」

「みー」

ジオはちょっぴり不満そうです。
きっと、早くジウムおじさんの家につきたかったのでしょう。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1439y/

夜の妖精の小さな旅

2011年11月2日03時17分発行